
平成 25 年度全国女性建築士連絡協議会

「地域と共生する居住環境づくり」～見直そう、これからの住環境と暮らし方～

[活動発表]

「地域防災における建築士の役割」－DIG の手法を用いて－ 安谷潔美(鳥取)

追加資料

■ 継続してきた防災関連活動 そして東日本大震災

平成 12 年 10 月 6 日 13 時 30 分、鳥取県西部で地震が発生しました。地震の規模はマグニチュード 7.3。この地震により鳥取県では震度 6 強の揺れを記録。非公開では震度 7 の所もあり、これは阪神淡路大震災と同じ規模かそれ以上の地震でした。境港市では液状化現象、米子市、日南町などでは、建物の倒壊、損壊と被害は大きいものでした。

その一方で、震源地が山間部で人口が少なく、地震発生時刻が日中であったこともあり、負傷者 182 人を出すものの死者はゼロでした。このため、世間からは忘れ去られる震災となり、震災を経験した私たちでさえも同じであったように思います。

しかし私たち青年女性合同委員会は、「このままで良いのだろうか！何か私たちにできることはないか」と考え、防災の基本を学ぶため、県防災局危機管理課の方を講師に勉強会を実施しました。そこで、いかに日頃からの備えや、消防団、自治会による防災活動が重要か、それらが連携することが大切かと言うことを学びました。また DIG の手法も学び、地域へと活動の場を広げていきました。

D I G【Disaster（災害）Imagination（想像力）Game（ゲーム）】の意味。

地図にマーカーを使って、広い道は茶色。狭い道はピンク色。川や水路は青色、公園は緑色と色塗りし、避難所や独居老人宅などマーキングしていきます。そうすると、上空から町を見下ろすイメージとなり、町の構造が一目で分かるようになります。

そして災害という観点から、まちの強い点、弱い点について話し合います。次に、災害が実際に起きたら困る時間、震度を具体的に提示し、地震発生後どうするのか？日頃からの備えは？などを、町の長所短所を意識しながら考えてもらいます。DIG により災害時の対応や備えを想像することができ、防災を意識するきっかけ作りとなったと思います。

活動を続けている中、平成 23 年 3 月 11 日、未曾有の東日本大震災が発生。津波や原発による被害の恐ろしさに「わたしたちに出来ることは何だろうか」と改めて考えることとなりました。

■ 松崎自主防災組織とのDIG

東日本大震災の約半年後の平成23年11月、松崎自主防災会委員よりDIGの講習会の依頼がありました。防災関係の人からの依頼は初めての事で、東北地方の人に限らず人々の心に大きな変化をもたらしたのだと感じました。

松崎地区は鳥取県中部で東郷湖畔に面しており、海拔0mの地区もあり全体的に地盤が低い地域です。大雨による道路冠水・浸水に悩まされており、鳥取県ではこの地区だけが、唯一浸水被害があります。また、津波の想定も大きく変更された地域でした。

私たちは更にDIGで学ぶテーマを、津波が襲来したと加えました。その時出た意見の中には

- ・高いところが災害危険区域になっていて、逃げられない。
- ・あの辺は、独居老人が沢山住んでいる。誰が助けに行くの？
- ・高台まで遠すぎて、走って行かない。
- ・車で移動しないと行けない。

困惑の意見が多かったのですが、対策を講じる一助となったと思います。また改めて、自分達の地域の問題点についても再認識ができ、今後の課題が見えてきたと感じました。

■ 今後の展開

私たちにできることは何か？と始めた青年女性合同委員会の防災活動ですが、昨年の中四国ブロック大会で報告したことがきっかけとなり、高知建築士会幡多支部からDIGの依頼がありました。

そこは高知県の西の端 四万十川下流の地域に位置します。津波の想定も5.5mから22mに追加公表された地域です。鳥取県の人よりも更に、震災に対する危機感を強く感じておられました。

私たちとDIGを学ばれた後も、地元で何度もDIGを実践され、DIGは四万十市全域に広がっていきました。

三陸地方では、「津波てんでんこ」という言葉があります。津波が来たら他人に構わず、それぞれ必死に逃げよという教えと聞いています。自分の命は自分で守る。自分たちの町は自分たちで守る。

震災は忘れた頃にやってきます。DIGの手法はその一部でしかありませんが、ひとりひとりが防災意識を高くもち、学び、災害に負けない町、災害に負けない人になるよう期待します。また、東北の一日も早い復興を願っています。